# 六花

# 10

2023

りっかはいくかい

# 桃花鳥（とき）

山田　六甲

蒲の穂や水辺のメトロノームにて
奥山へ車駈りゐる秋はじめ
走蕎麦傘のしづくの背をぬらす
蒼き天ささふる七種（なぐさ）の瀧もみぢ
妻の手を引くもなれたる秋はじめ
ご近所に猫をたづねてゐる晩夏
鵺（ぬえ）の鳴く六甲山を下りけり

鵺鳴くと湯に手鏡を洗ひけり
徳島の青柚子を擦り冷さうめん
牛の乳呑みつつ秋の彼岸餅
落鮎の岩に腹打ち卵産む
三瓶山の源泉ぬるく浸かりをり
君たちは野良猫吾は俳句野良
腰折つて秋の簾に挨拶す
桃花鳥（とうかちよう）柿の佐渡には見当たらず
音立てて木洩日を出る秋の蠅
樫原の奥に風ある秋彼岸
市役所に句を詠めるのか龍田姫
ある落葉渦生みながら落ちにけり

PDF= 俳誌の salon

秋めくや湯殿の窓を開けずとも
落鮎の泡のごとくや化粧塩
串を打つ泳ぐかたちに鮎を曲げ
落鮎を焼くと杉葉に火を点けて
大甕の放生会待つ緋鮒かな
放生会に子供の手からあばれ鮎
今からは柿が甘しと法師蝉
伸びゐたる蓮の形に月あかり
月あかり茎の曲がりし蓮の茎
朝まだき母は御萩の餡を炊く
川音に三日三晩の踊りかな
郡上なる下駄擦り減らす踊りかな

落ちさうな町家の階段秋すだれ
虚子の軸佐渡は銀河のはたごかな
殿さまの手に間に合はずおけさ柿

PDF= 俳誌の salon

# 亡き姉に電話してみる夏の夜　草場つくし

なきあねにでんわしてみるなつのよる　くさばつくし

淡い期待。亡くなったばかりで姉の死が受け入れられない、信じられないのだ。もしかしだらいつも通りの姉の声が電話に出るかもしれない。夏の夜の寝苦しさに、試しに電話をかけてみた。出るはずもない姉が出そうな気がする。ドキドキしながら電話をかける。「どうしたの？」と返事があれば何と言おうかとまで考えを用意してみた。が電話はむなしく呼び続けるばかり。姉上が電話に出ないと分かっていながら掛ける切なさが滲み出ている。





# 若鮎をぬるつと掴みまだ少女　冷泉　花

わかあゆをぬるつとつかみまだしょうじょ　れいぜいはな

若鮎というのは上流へ遡上している鮎で、掲句「ぬるっと」という実感的表現が成功している。鮎の遡上に都合のよい、つまり水の抵抗を受けにくいようにか、天敵から逃れやすいようにぬるっとしているように思えるではないか。掲句は鮎のつかみ取りの場合を思い起こした文芸的の真実である。



PDF= 俳誌の salon

雪嶺抄

## 雨の一の宮　◎　笹村　政子

軒深く出石城下の夏つばめ
紫陽花や雨の但馬の一の宮
大梁の艶黒ぐろと燕の子
酒少し買ふにつばくろ談義かな
一番子今朝巣立ちしと主かな
皿そばを幾枚重ね夏のれん
梅雨晴間石切り山の光りけり
梅雨の蝶影落しつつ移りけり
花合歓の散りたる水田明りかな
訪ふたびに母のうつつや合歓の花

紫陽花や雨の但馬の一の宮

但馬の一の宮は播磨国一の宮出石神社であろう。私は十四五年前に行ったきりであるが、その杜には大樹で囲まれ相当歴史を感じさせるところ。いわれや歴史をもう少し調べて見たいと思いながら今日に至ってる。その鬱蒼と立つ大杉の根方に咲く紫陽花は幽玄のいろをしておりまさに神域という感じが漂う。掲句は語調もととのい佇まいも美しい。

一番子今朝巣立ちしと主かな

前後の作品から燕の巣立ちのことだろう。燕の一番子が巣立つとすぐに巣を繕いなおし卵を産み二番子を育てて巣立ちさせるのが通常であろう。巣の家主はそのことをよく観察していて、作者に教えて燕の話題に話が弾んだのだろう。皿そばの作品。出石の皿そばは通常、一人前五皿であるが、掲句は若い人ならば何枚と追加できる。五皿食べるともうお腹一杯であるが、店に入って冷たくて何皿も食べたものだと挨拶したのである。

蟋蟀抄

## 夏の星　◎　志方　章子

美しきものは淋しき夏の星
くぐる時茅の輪の匂ひ追ひ来る
笑ひつつ種飛ばし合ふ西瓜かな
老いもよしスプーンで食ぶる西瓜かな
黒髪のいつそう黒き洗ひ髪
花氷に閉ぢ込められし金魚かな
渋団扇年寄りくさき気分かな
生ぬるき水の飛びたる水鉄砲
夏座布団足にひんやりしてをりぬ
引き継ぎし父愛用の籠枕

くぐる時茅の輪の匂ひ追ひ来る

この句は鑑賞したくなる。夢風撰。

渋団扇年寄りくさき気分かな

渋団扇とは柿渋をうちわに塗ることにより、和紙を丈夫にし、長持ちさせ、防虫効果の役目も果たす。熊本の来民（くたみ）でしか作られない来民渋うちわはその渋みと強さに人気があって人気があったという。ところが我々昭和の人間には何か古臭く感じたのだろうが、いまはこういうものが却って新しく見直されている。まあもっとも俳句にうつつを抜かす我々こそ古臭いと若い人たちは思うのであろう。

「花氷」の句は生きた金魚なのか考えるだけでも怖い。

PDF= 俳誌の salon

はまなす抄

## 表具屋見本　◎　升田ヤス子

何やらが落ちて萍揺らぎけり
梅雨晴れや草の水玉ビーズなし
表具屋の見本色褪せ青時雨
城跡を攀づや夏草わしづかみ
夏料理喉のあやしき躍り食ひ
簗音の押し寄せてくる夏料理
弁慶の一串抜きて夏料理
緑雨かな舟絵馬に堂狭まりて
紅色の源平うつぎ痛みけり
梅雨夕焼ファンダミラーのぽつと燃ゆ

表具屋の見本色褪せ青時雨

襖を張り替えるため表具屋に紙色見本を見せてもらって検討している。あれこれ見本帳をめくって見せてくれるが、どうも経年劣化か、色褪せて見える。それだけ表具屋の歴史もかなり古くなっていたのだろう。しかし、近頃流行りの斬新な見本を出してくれるのでなく、顧客や部屋に合わせてみせてくれたのかもしれない。その見本帳を見ながらあれこれ会話が交わされたのであろうと想像が広がる。萍（うきくさ）の句、「何やらが」浮き草に落ちて揺らいだのであるというのだが、その何やらが何なのか言えばこの句は超独創的になる。

「夏草を掴みながらよじ登る」城跡の作品。城のあった昔と今との対比も歴史を思わせて面白い。まるで茅で手を切りそうな作品。夏料理の作品、「喉があやしい」とい一つ。

別府抄

## 黒きもの　◎　廣畑育子

隠沼の夏草長けるばかりなる
藺の花に遊びをりたる蝶蜻蛉
物憂きは泰山木の花なりぬ
飛蝗の子一センチなる晴姿
灸花揺れ連なりし可愛さよ
黒きもの鱣と気付くに間のありぬ
赤灯台鱣の行き交ふ波間かな
干さる蛸棹の弛みも無きほどに
平屋群カンナの花を塀とせる
向日葵や農家を売りとするめし屋

黒きもの鱣と気付くに間のありぬ

１０年ほど昔、室津千軒へぶらりと出かけたら、育子のいうような状態そのままで、漁港を鱣が四五尾泳いでいるのを見て驚いたことがある。しばらくしてたしかに鱣だと気づいて思わず声を出した。こんなところにいるのかという驚きと実物を見るのが初めてだったことも胸の高まりを覚えた。育子もそうだったのかもしれない。湾内を泳ぐ魚で鯖や鰯より大きな姿を実際に見たことがなかった驚きや感動は、掲句のように詠んでおくことも大切である。こういう作品はあまりない。だが子どもの頃瀬戸内海で捕れたエイを食べた記憶もかすかにあるが定かではない。掲句気負いのない表現に好感が持てる。

PDF= 俳誌の salon

垂水抄

## 鮎の光り　◎　永田万年青

しなりたる竿より鮎の光りけり
七階の病室にまで蝉時雨
吾の前の患者西日に驚きぬ
サングラス身から離さばすぐ忘る
万緑やもこもこもこと六甲山
万緑の中に立ちゐて憂さ消える
真夏日の近場で済ます昼餉かな
西瓜割当たりて砕け散りにけり
大西瓜黒縞模様炎のごとし
かぶりつく西瓜の底に歯形あり

しなりたる竿より鮎の光りけり
万年青にしては珍しい句風。この句考えが走りすぎて、は誤解を招く。「しなる竿よりも鮎が光ったのか」と思ったが、これは俳句独特の省略法で鮎が掛かって竿がしなりその糸の先に掛かった竿と鮎が光ってるというのであろう。普段あまり想像力を働かせない万年青も今変化（進化）をしつつあるのかも。
鮎は香魚といわれまた、鮎独特のメロンに似た香りと輝きのある川魚でもある。その掛かった鮎の光は釣り人の喜びの輝きも示唆しているのでもあろう。ちなみに鮎は年魚で一年の命。ある説では速く生まれ変わると進化が早まるとも。虫などとおなじように無駄に短い一生でもなさそうだ。人間も俳人も一年でまったく別のものに変化すると福岡伸一先生も。
t

酒呑（ささの）抄

## 盆の月　◎　谷口　一献

デーゲーム観て案の定暑気中り
素麺の流し留めにも黒光石
涼の字の団扇の主は貴船茶屋
解禁の麦酒呑み過ぎまた禁酒
夫々の短夜楽し老い暮らし
女性向け冷素麺はピンク色
宇宙への旅行も近し盆の月
水に亀戻す功徳や炎天下
鳴声のふと無くなるや秋隣
パスワード忘れてあがく夜長かな

宇宙への旅行も近し盆の月
宇宙とは「百科事典」でみたら、国際航空連盟の規定によると空気抵抗がほぼ無視できる真空である高度１００㎞以上のことを指す。とある。宇宙はどうして真空なのかも知りたい。「夫々の短夜楽し老い暮らし」も、羨ましい考え。短夜とは寝苦しく暑くて気がついたら明け方になっていたというのが季語の本意。なのにその短夜を夫婦お互いに干渉し合うことなく、楽しんでいるという。楽しみ方は趣味か食べ物か飲み物かであろうと思うが寝苦しくいやな夜だという考えが起こらない。これこそ年齢を重ねて到達する理想の境地であろう。「解禁」の句、せっかく禁酒して体調がもどちたのに、そのせいで酒を飲みもとの木阿弥に。「もとの木阿弥」はことわざ辞典によると朱塗の朱がはげて木地があらわれた意の元の木椀から転じたものとする説など説が沢山ある。「亀を水に戻す」功徳は季題、放生会なども、この句の内容が豊富で読んで楽しい。

PDF= 俳誌の salon

つづじが丘抄

## 染め付け絵皿　◎　延川五十昭

鮎を盛るそめ付け皿の蕪の絵
焼鮎の骨抜く箸の杉香る
老酒に揚梅つまむ酒亭かな
浄土寺や阿弥陀三尊蝉しぐれ
昼寝せば横で大鈴ふる男
大龍の鱗のごとし夏の巌
鎮まれる闘龍灘の極暑かな
鮎焼や播州弁の若女将
歯ごたへと黄色好みや真桑瓜
天麩羅に寿司に塩焼鮎づくし

焼鮎の骨抜く箸の杉香る

焼き鮎の匂いでなく、箸が匂ったと句の眼目をずらした。いかにも俳人的感覚。「浄土寺」の作品。リズムと音調が心地よい。真夏の暑さの中に浄土寺の阿弥陀三尊を配すると心地よく蝉時雨も涼しく感じられるよという作品。

覚えやすく整ったリズムと言葉は「浄土寺や」とくれば「阿弥陀三尊蝉しぐれ」と繋がって記憶されやすい。何より覚えやすいのが名句の条件。「夏の巌」の作品、大きな龍のようであると感得した作品。瀧を這う水はたしかに鱗のように見える。水もそんなに多くない瀧でもある。焼き鮎の作品。播州弁というのがどういうイントネーションか分からないが、地方の訛りを心地よく聞いている様子が伝わってくる。故赤松君も播州生まれだから或いは懐かしく聞いているのかも。単なる報告の句でもいいが情緒が入ると句になる。

つつじが丘

## 鮎の宿　◎　延川　笙子

昼食に闘龍灘の鮎料理
塩振つてS型に鮎焼かれけり
龍神を小さく祀る鮎の宿
鮎塚や一群れの萩囲みをり
鮎の川流れる雲を巻き込みぬ
鮎の川投網禁止の札立てて
天然の鮎になりたや烏瓜
熊蝉やこんな高みに殻残し
隣より寄せ来て庭の蝉五匹
蝉時雨蝉には蝉の浄土あり

龍神を小さく祀る鮎の宿

龍神は暴れもするが、普段はその流れによって鮎を育て鍛える流れでもある。その流れが暴れないように龍神を祀っている。竜神が時折暴れるくらいの流れだから鮎も育つので、営業に差し支えがあってはいけない配慮が働いてるのだろう。昼食とかいて短詩では中食「ちゅうじき」と美しく発音もするがそこまで表現にこだわることもないだろう。ちなみに中食は一日二食の習慣のとき、朝食と夕食の間に軽くとる食事。江戸時代の習慣。後には昼の食事をさすようになった。「熊蝉の句」蝉の殻がこんなに高いところに脱ぎ捨ててあるのはいかにも蝉の王者だなあ、という感慨。「隣より寄せ来て」五匹の蝉が我が家で喚くよという句も面白い。どうせ喚くなら立派なお屋敷の庭の方がいいという蝉の気持ちもわかるなあ。蝉時雨の句。「蝉には蝉の浄土」というのは仏や将来仏となる菩薩（ぼさつ）の住む清浄な国土をいう（蝉以外立ち入れない域）があるというのはなんとなくわかる。穢土の反対。

PDF= 俳誌の salon

タジッサ抄

## 竹叫ぶ　◎　田尻　りさ

台風の予兆か丘に竹叫ぶ
小流れは囁いてゐる熱暑かな
熱湯が沸き立つてゐる朝の蝉
君の名は七夕竹の最上部
クーラーや薬の為の夕ごはん
大木の夾竹桃やごみ屋敷
夕立にうなだる草の一抱へ
七夕の垂り尾の音さやさやと
七夕の紙撚の和紙を切り揃へ
炎天や薄荷の葉つぱ指に揉む

台風の予兆か丘に竹叫ぶ

叫ぶと書いて「おらぶ」と読みたい。現代はスーパーコンピューターの気象予報も発達して台風が近づいて来るのがある程度正確に分かるが、昔は動物的感覚で人間も雨嵐は木々のざわめきが違うと危険を察知していたが掲句は作者というより人間も普段とは違うぞと肌で感じている。明治の人虚子も「大いなるものが過ぎ行く野分かな」と人知の及ばない神を感じていたようだ。りさの中にも動物的感覚が今もあるのだろう。

「朝の蝉」の句、その煩さを「熱湯が湧きたっている」と表現。「クーラー」の作品も「薬の為の」と言うのが面白い。つまり食後の服薬のことで、食欲が暑さのせいで減退しているけれど薬を呑むために食べるという現代人の贅沢を詠んでいる。

箕面抄

## 夏の朝　◎　出口　誠

雨を呼ぶ風の吹きたる夏の昼
ハンバーグステーキで飲むビールかな
串かつをさかなにしたるビールかな
ひまはりの我と背たけを比べをり
ひまはりの我が目と鼻の先に咲く
ひまはりが我が背丈より高く咲く
夏の宵妙に夜風の心地良し
夏の朝誰が出したるごみ袋
夏の昼ゲームの姫の見つからず
夏の昼ゼシカはどこへ行つたやら

夏の朝誰が出したるごみ袋

迷惑なのか家のだれかが外に出したのか情景がよく分からないが、きっと家族のだれかがごみ袋を出したのであろう。我が家でも家内がごみ袋を捨て場に運ぼうと家の前に置いていたら、御近所の誰かが捨ててくださっていた。家内が普段足が不自由なのを知って運んでくださったと感謝している。

「串かつ」の作品。勝手に鑑賞すると串カツの店で仕事帰りに麦酒片手にしているのであろう。もちろん二度づけ禁止。ゼシカというのが私たち年代にはよく分からない。百科事典で調べてみると「ゼシカとは、ゼシカ・アルバートー・ゲーム『ドラゴンクエストⅧ　空と海と大地と呪われし姫君』の登場人物。こういうゲームの主人公の題材が俳句に出てくるのであろう。

PDF= 俳誌の salon

相生抄

## 流燈　◎　江見　巌

雨乞や蟻一匹の踊りだす
男より女の怖し鵜の序列
沙羅の花小さき花の寝釈迦かな
キャンプの灯いろいろ見える星の夜
玄関の人に見らるる水中花
墓ねぶる前うしろより青とかげ
パナマ帽鏡にうつす父の顔
鱧の皮とけこみゆくや京言葉
村人の総出となるや盆の路
流燈の一つ間を抜けて行く

キャンプの灯いろいろ見える星の夜

星の綺麗な夜それぞれの張ったキャンプの灯が見えて美しい。もっとも星の美しい場所で、町の灯と混ざって居るわけでなく、空気もおいしく美しいキャンプ場。

「青とかげ」の作品、墓ねぶるとは墓石を舐めているという意味だろう。因みに広辞苑を捨てたので、残っていた啓成社の「大辞典」（上田萬年）には「舐ぶる」とあったのでやはり舐めるに同義であると思われる。因みにインターネットで調べてみると勝手な私見が乱れていてまるで参考に成らない。こういうのは規制できないものか。

「流燈」の品「一つ間」の位置関係がよく理解できないので書かない。俳句は「解釈は一つ、鑑賞は多岐にわたる」である。しかしこれによく似た作品は昔の「狩」に沢山詠まれていたように思う。

須磨の奥抄

## 亡き姉に電話　◎　草場つくし

白百合や柩の姉を包みゆく
火葬炉にゴトンと柩青時雨
仏事終へ車座となる西瓜かな
亡き姉に電話してみる夏の夜
しなやかに岩肌なめて落つる滝
弧を描く濠の噴水逆光に
水隠す白睡蓮や今朝の池
春愁や難波花月のかぶりつき
朝風に山吹白く揺れにけり
狭庭には祖父の値ゑたる儂山吹

亡き姉に電話してみる夏の夜

哀しい電話の使い方。もしかしたら姉が使っていた電話に出るかも知れないと。不可能なことが分かっているのにもしかしたら、という行為が哀しい。夢風撰。

なお今月は姉上の葬儀の模様が丹念に詠まれているが庭に目を移すと「狭庭には祖父の植ゑたる濃山吹」があり山吹が咲くたびに祖父のことが忍ばれる。こういう庭の使い方があるのだと感心。白睡蓮の句、見ての通りの写生句であるが、「水隠す」にただの報告から抜けた詩がある。「難波花月のかぶりつき」も鑑賞したくなる。

PDF= 俳誌の salon